

『120分 de 法華経！』 vol.21 Dec. 2025

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 如來壽量品第十六 〈前半〉』 (本門・正宗分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習學」の3つのステップ 「聞解・思惟・修習」

『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行)

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得

たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例: (P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



〈如來壽量品（前半）のあらすじ〉

大地から涌き出た無数の大徳の菩薩たちは、釈尊が教化した菩薩であることを伺い、弥勒(みろく)菩薩ら一同は大変不思議に思い、どうかその真実をお教えくださいと懇願しました。

【『真実』を説くにあたり、聴聞(ちょうもん)する心構えを持つことを釈尊が諭(さと)す】—
【二七二頁 一行】すると世尊はそれを受け、多くの菩薩たちとすべての大衆に向かって仰(おお)せになりました。

（『汝等(なんだち) 當(まさ)に如來の誠諦(じょうたい)の言葉を信解(しんげ)すべし』） 「これより『如來の真実』を明らかにしましょう。ですから、この『真実の言葉』をしっかりと信じて受け止めて、固く信受するのです」と、『如來の真実』を聞く者の心構えを諭(さと)されたのでした。

釈尊はこの心構えを、三度(みたび)重ねて申し述べられたのでした。

【《真実》を聴受(ちょうじゅ)することの覚悟を、弥勒菩薩が表明】――

【二七二頁 四行】すると釈尊の深いお言葉を聞いた菩薩たち一同は、弥勒(みろく)菩薩を先頭にして合掌して仏さまに申し上げたのでした。

〔『世尊唯願(ただねが) わくは之(これ) を説きたまえ。我等當(まさ) に佛の語(みこと) を信受(しんじゅ) してまつるべし』〕 「世尊よ。どうか『如來の真実』についてお説き下さい。私たちはそのお言葉を心から『信受します』と決意を込め、世尊に申し上げました。そしてその懇願(こんがん)と決意の言葉を三度(みたび)繰り返して申し上げたのでした。

【世尊が、いよいよ《真実》『久遠実成』を説く。本仏の『本体』を明かす】――

【二七二頁 終四行】菩薩たちの三度にわたる真剣な決意を目(ま)の当たりにした世尊は、菩薩たちが真剣に懇願していることを強く感じ取られましたので、静かに口を開かれたのでした。

【二七二頁 終三行】〔『汝等(なんぢ) 諦(あきら)かに聽(き)け、如來の秘密神通(ひみつ じんづう) の力を』〕 「皆の者よ。心を清らかにして聞くのです。これより『如來の本体』と、計り知れない『如來の不可思議な力』。すなわち『如來の真実』を解き明かすことにしましょう」

【二七二頁 終二行】「一切の人々や天上界に住んでいる者、そして阿修羅(あしゅら)をはじめとする鬼神などあらゆる者はみな、現在、こうして法を説いている私は、釈迦族の王宮を出て、その後、菩提樹のもとで悟りを開いたものだと思っているのでしょうか。善男子よ。実際はそうではないのです。☆／〔『我實(われ じつ) に成佛してより已來(このかた)、無量無邊百千萬億那由他(なゆた)劫なり』〕 じつは私は、仏に成ってからはかり知れない『永遠の時』が経っているのです」

【『久遠実成』という時の長さを譬えて説く】――

【二七三頁 二行】「たとえば、ある人が五百千万億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)の数に及ぶあらゆる世界(星)に存在する三千大千世界の国々を集めて、それを磨(す)り潰(つぶ)して小さな粉末にしたとしましょう。それを残らず持って東方へ向かい、五百千万億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)という国(星)を過ぎるたびに、その粉末を一粒ずつ落として行き、最終的にその粉末を落とし尽くしたとしましょう。善男子よ。これを達成するためには、一体どれだけの国々(星)を通り過ぎなければならないでしょうか。その無数におよぶ国々(星)の数を考え致すことは、とてもできないことあります」

【弥勒菩薩らが、『久遠実成』の時の長さをはかり知ることはできないと答える】――

【二七三頁 六行】すると弥勒(みろく)菩薩をはじめとする菩薩達が、声をそろえて申し上げました。「世尊よ。それはとても計り知れない無数の国々(星)で、まったく私どもの力では考え及ぶことはできません。もし声聞や縁覚などの尊い境地に達した者たちが、迷いをすっかり払い尽くした清らかな智慧をもって数え上げたとしても、決して計り知ることのできない数であります。私どもはその声聞・縁覚よりも修行が進み、不退転の菩薩の境地にいる者ですが、いま世尊が説かれた国々(星)の数については、考え尽くすことができません。世尊が仰(おお)せられる国々の数は、まことに無量無数の国々でございます」

【『久遠実成』の時の長さと、仏はあらゆる世界で法を説き続けていることを明かす。

【本仏の『絶対性と無限性』を説く】――

【二七三頁 終三行】すると世尊は大菩薩たちに仰(おお)せられたのでした。

「諸々(もろもろ)の善男子よ。今こそはっきりと告げましょ。この通り過ぎたすべての世界(星)をさらに全部まとめて粉末にし、その粉末の一粒一粒を『劫・こう』という時間に置き換えて、私が成仏してから今日までの時間というものは、その粉末の数の『劫』よりも、さらに百千万億那由他阿僧祇劫(なゆた あそうぎ こう)も長い時間と年月が経っているのです」

【二七四頁 二行】☆『我常(われ つね)に此の娑婆世界に在(あ)って説法教化す』「そういう計り知れない無限の過去から、私は常にこの娑婆世界に存在して衆生を教化しています。」☆『亦餘處(またよしょ)の百千萬億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)の國に於ても衆生を導利(どうり)す』「私はこの娑婆世界だけではなく、その他のあらゆる世界に於いても、同様に衆生を導き続けているのです」

【本仏は『久遠実成』の存在であり、あらゆる『方便』を用いて衆生を導く。

【『衆生済度(さいど)』と、『衆生一人一人の機根を見抜いて、方便』を示す】――

【二七四頁 三行】「諸々(もろもろ)の善男子よ。このように私は無限の過去から無限の未来まで『生きとおし』の存在です。そして、かつて『序品』でも説いていいるのですが(参照『三部經・五五頁七行』)、/『是(こ)の中間(ちゅうげん)に於て我然燈佛等(われねんとうぶつとう)と説き、又復(またまた)其(そ)れ涅槃(ねはん)に入(い)ると言ひき。是(かく)の如きは皆(みな)方便を以て分別せしなり』』『然燈仏(ねんとうぶつ)』など様々仏が世に出て来て衆生を救ってきましたが、それはほかでもありません。それらの仏は、衆生を救うために現れたのです。ですから仏が現われることも、そして仏が滅することも、それらはすべて、衆生を教え導くための『方便』なのです」。

【二七四頁 五行】「諸々(もろもろ)の善男子よ。もし或る衆生が私の所にやって来たら、私は『仏眼・ぶつげん』をもって/『諸根(しょこん)の利鈍(りどん)を觀(かん)じて、度すべき所に隨(したが)って、處處(しょしょ)に於て説き』その人の機根が高いのか低いのか、その程度のほどを見分けることができます。そしてその人の程度にしたがって、その者がどのようにすれば『仏の悟り』をいち早く得ることができるのかを見極め、導く手段を講じます。ですから私はその人を導くために、これまで様々に違った仏の名を示して導いてきました。また仏の寿命についても様々に違って説いており、仏の寿命に長短があるように説いてきました。/『亦復(またまた)現(げん)じて當(まさ)に涅槃(ねはん)に入(い)るべしと言ひ』』そして寿命が尽きて入滅しても、ふたたび世に現われて教えを説き、さらにまたこの世を去っていくということについても述べました。/『又種種(またしうじゅ)の方便を以て微妙(みみょう)の法を説いて、能(よ)く衆生をして歡喜(かんぎ)の心を發(おこ)さしめき』』仏は方便を用いて深淵(しんえん)なる『真理の教え』を相手に応じて様々に説き分け、それによって衆生に大きな歓喜を与えて來たのです」

【二七四頁 終五行】「諸々(もろもろ)の善男子よ。衆生のなかで声聞(しょうもん)や縁覚(えんがく)の境地を求めるだけで充分だと考え、そして徳が少なく煩惱が多い者に対しては、その者が分かり易(やす)いように『私は若い時に出家し、これこれ修行をした結果、仏の悟りを得ることができた』ことを伝え、私自身のように行えば仏に成れるのだと説き示したのでした」

【二七四頁 終三行】 ☆ 『然 (しか) るに我實 (われ じつ) に成佛してより已來 (このかた)、久遠なること斯 (かく) の若 (ごと) し』 「しかし実際に成仏したのは『久遠の過去』であることは、さきほど説いた通りです。『久遠実成』の存在なのです。ただ、方便として『私は今世、若い時に出家し、そして仏と成った』と説いたのでした」

【『六或示現(ろくわくじげん)』をもって、本仏は衆生を導く】—

【二七四頁 終行】 「諸々 (もろもろ) の善男子よ。私が説く教えには表現の違いがあっても、それは全ての衆生を救うために違いがあるのです。そのためには、／ 『或 (あるいは) は己身 (こしん) を説き、或 (あるいは) は他身 (たしん) を説き』 ①ある時は仏の本体そのもの(【己身・こしん/法身仏・ほっしんぶつ】)について説くこともあるが、そうではなく ②他の特定の姿として現れる仏(【他身・たしん/報身仏・ほうしんぶつ】)について説くこともあります。／ 『或 (あるいは) は己身 (こしん) を示し、或 (あるいは) は他身 (たしん) を示し』 ③またある時は、仏の身(【己身・こしん/應身仏・おうしんぶつ】)として現れることもあります。 ④その他の様々な聖人・賢人(【他身・たしん/仏以外の姿】)として出現することもあります。／ 『或 (あるいは) は己事 (こじ) を示し、或 (あるいは) は他事 (たじ) を示す』 ⑤そしてまたある時は、仏の大慈大悲の救いのそのままの相(すがた)(【己事(こじ)】)をあらわすこともあります。 ⑥時にはその人にとって試練となる形(【他事(たじ)】)となって救いの手を差し伸べることもあります。／ 『諸 (もろもろ) の言説 (ごんぜつ) する所は皆實 (みな じつ) にして虛 (むな) しからず』 仏の説き示すところは全て『真実』であり、一つとして無駄なものはないのです」

— 【『六或示現(ろくわくじげん)』】

【本仏が見る『現象世界』の真実について】—

【二七五頁 三行】 「なぜのこのように仏は形を違えて現象を現わし、説き示すことができるのかといえば、それは、仏は現象世界の『実相』を見極めているからにはほかなりません。すべての現象は発生し、変化し、消滅していくものですが、それは目に見える現象のうえだけのことであって、如来の眼をもってすべての実相を見ると、／ 『生死 (しょうじ) の若 (もし) しは退 (たい)、若しは出 (しゆつ) あることなく』 すべてはその存在自体が『在る・無い』という存在ではなく、ただ【空】であり、つまりはすべては『縁起の法則』によって成り立って存在しているものなのであります。その意味ではすべての存在は、『本質においては平等』な存在なのであります。

【二七五頁 五行】 『實 (じつ) に非 (あら) ず、虛 (こ) に非ず』 「目の前の現象が『在る』(実)と見るのも間違いであれば、『無い』(虚)と見るのも間違いです。／ 『如 (によ) に非 (あら) ず、異 (い) に非ず』 また、物事がいつも存在して変わることのない『常住する』(如)と見るのも間違いであり、だからといって『常住のものはない』(異)と断定するのも間違いです。つまり『不变の状態ばかりで見るのも間違い』であり逆に『変化する状態ばかりみるのも間違った見方』であるのです。如来は、現象世界(『三界』— 欲界・色界・無色界)に住んでいる人間の見方を超えて、すべての物事の本質、『実相』を見極めているのです」

【本仏の救護は『永遠』に行なわれ続けている】—

【二七五頁 六行】 『如來明かに見て錯謬 (しゃくみょう) あることなし。諸 (もろもろ) の衆生、種種 (しゅじゅ) の性・

種種の欲へ 種種の憶想 (おくそう)・分別あるを以 (もつ) ての故 (ゆえ) に』「如來は『實相』を明らかに見極めているために見誤るということが決してありません。ところが衆生は、それそれが持つ様々な性質・欲望・行動・思想・利害を前面に打ち出して『自分のものさし』で物事を見てしまう習性があるため、それぞれの欲望・思想・利害がぶつかり合って苦が生じ、争いが起こるのです。／『諸 (もうもろ) の善根 (ぜんごん) を生ぜしめんと欲して、若干 (そくばく) の因縁・譬諭・言辞 (ごんじ) を以て種種に法を説く』 それゆえ如來は、衆生を完成された人として大本から徹底的に向上させ、人格を高めさせるために、『過去の体験・譬え・理論』（注：『三周の説法』— 法説周・譬説周・因縁説周）を様々に説き分けて教化していくのです」

【二七五頁 終五行】『所作 (しょさ) の佛事 (ぶつじ) 未 (いま) だ曾 (かつ) て暫 (しばら) くも廢 (はい) せず』「そして本仏の教化は、これまでに『一度も休まず』に行い続けているのです」

【二七五頁 終四行】☆『我成佛してより已來 (このかた) 甚 (はなは) だ大 (おおい) に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず』「仏は無限の過去から仏であり、また壽命も無量阿僧祇劫(あそごう)という無限であります。そして仏は常にこの世に住していて、『滅する』ということはありません」

【二七五頁 終三行】「諸々の善男子よ。私が前世において菩薩道を行じたために、その功徳によって壽命は大変長いものとなり、なかなか尽きるものではありません」

【仏の『滅度』の眞の理由】—

【二七五頁 終二行】ところが私は皆さんに対して『私は、あと少しでこの世を去るであろう』と言いました。／『然 (しか) るに今實 (いまじつ) の滅度に非 (あらざ) れども』 しかしこれは本当に滅するのではなく、／『如來是 (こ) の方便を以て衆生を教化す』 それは衆生を教化する『方便』として、みんなの前から姿を消すことの宣言なのです】

【二七六頁 一行】「なぜこのような宣言をするのかと言えば、私がいつまでもみんなの前にいるということになれば、安易な心が生じてしまいます。／『薄徳 (はくとく) の人は善根 (ぜんごん) を種 (う) えず』 そのうえ 徳の薄い人は良い行いをすることができず、自らを高めようとすることをやらなくなります。／『五欲に貪著 (とんじやく) し、憶想妄見 (おくそうもうけん) の網の中に入 (い) りなん』 そして自らを高めることができないために、結果的に五感の欲にとらわれて、『自己本位のものの見方・考え方の網』の中にがんじがらめになり、正しい生き方ができなくなるからです。私がいつまでも生きていてこの世を去ることがなければ、人々は、教えは『聞きたい時だけ聞けばよい』というわがままな心になり、その結果、怠け、仏の教えに触れることができが貴重であるということに気づかず、ついには仏を敬わず、教えを聞こうという『真剣な心』を起こさなくなります」

【二七六頁 四行】「そのために如來は、／『諸佛の出世には值遇 (ちぐう) すべきこと難 (かた) し』』『仏が世に現わることに巡り会うことは、非常に難しいのだ』ということを、『方便』を以て説くのです。なぜ難しいのかといえば、徳の薄い人は無量百千萬億劫という果てしない時を経て、やっと仏に巡り会える人もいれば、まったく巡り会うことができない人もいるのです。ですから私は『比丘たちよ。／『如來は見ること得 (う) べきこと難 (かた) しと』 仏を見ることは大変難しいのである』と説いているのです」

【二七六頁 終六行】「ですから、仏に巡り会うことが難しいとわかれば、／『心に戀慕 (れんぼ) を懷 (い)

だ)き、佛を渴仰(かつごう)して便(すなわ)ち善根を種(う)ゆべし』ひとりでに仏を慕(した)う心を抱(いだ)くようになり、喉(のど)が渴(かわ)いた者が水を求めるように、仏を求めるようになります。そうすれば自然と善い行いを実践し、自らを高める心を起こすようになるわけです」

【七六頁 終四行】『是(こ)の故(ゆえ)に如來、實(じつ)に滅せざと雖(いえど)も而(しか)も滅度すと言う』

「ですから、如來は実際には滅度しない『生き通しの存在』でありながら、方便としてこの世から姿を消すのだと説くのです。善男子よ。それは私一人だけではありません。すべての仏も同じように説くのです。それは衆生を救うために行うものであって、嘘ではなく、空しいことはない真実なのです」

【仏の『滅度』の真の理由を、『譬え』をもって説く】――

『良医治子(らいじ)の譬え』――

【七六頁 終二行】世尊はこのことを譬え話で説かれました。

「あるところに優(すぐ)れた医者がいました。その医者はあらゆる薬の処方(しょほう)を極めており、どんな病気も治す名医でした。その医師にはたくさんの子どもがいました。十人、二十人、いや百人もいました。ある時、用事ができて他国へ出かけることになりました。しかしその留守中、なんと子どもたちは誤って毒を飲んでしまったのです。父親がそばにいたならばそのようなことは起きなかつたのですが、子どもたちは父親がいないことをいいことに、好き放題ふるまい、誤って毒を飲んでしまつたのです。毒薬は徐々に体にまわり、子どもたちは地べたをころげまわつて苦しみました」

【七七頁 二行】「そこに医師である父が帰ってきました。子どもたちは皆、父の帰りを喜びました。しかし子どもの中には、毒のために正気をなくしている者もいれば、それほど毒のまわっていない子もいました。それでも子どもたちは、遠くから父の姿を見つけると一様に喜び、父の前に跪(ひざまず)いて懇願(こんがん)するのでした。『お父さん。よく帰つて来てくださいました。私たちは愚かにも、誤って毒を飲んでしまいました。どうか治療して命を助けてください』と頼んだのでした」

【七七頁 五行】「父は苦しむ子どもたちを見て、『これは直ぐに助けなければならぬ』と思い、薬を調合して一番よく効く薬を処方しました。その薬は美味しく飲み易(やす)く、色も香りも味も素晴らしい薬でした。そして子どもたちに与えて『この薬は大変よく効く薬で、色も香りも味も良いものだよ。さあ、飲みなさい』」

【七七頁 終四行】『速(すみや)かに苦惱を除いて復(また)衆(もろもろ)の患(うれえ)なけんと』「『しかも今のかみがいっぺんで治る薬だよ。そればかりか、これから先、もう二度と苦しまず、どんな病気もしなくなる妙薬(みょうやく)だよ』と言って、薬を差し出してくれました」

【七七頁 終四行】「子どもたちの中には正気を失っていない子もいて、その子らは良薬の色・香りの良さにひかされて素直に薬を飲みました。すると苦しみはすっかり消え、治つてしまつた。しかし正気をなくしている子たちは、与えられた薬をどうしても飲もうとしません。なぜなら、体が毒氣で深く侵されているために、色も香りも味も良い薬なのに、それをひどい色で、不快な香り、味も悪くてまずいと勝手に感じて、飲む気になれないでいたのです」

【二七八頁 二行】「そうした薬を飲まない、正気を失った子らを見た父は、次のように思いました。／〔此の子懶（あわれ）むべし〕『ああ可哀そうに、この子たちは、毒のために正気をなくしている。心力顛倒（てんどう）しているのだ。私に会ってあんなに喜び、そして『助けてくれ！』と頼んでいたながら、薬を飲まないでいる。このままだと子どもたちが危ない。よし。この子らが必ず薬を飲む方法を取ろう』と思い、子どもたちにつきのように語りかけたのでした」

【二七八頁 五行】「『子どもたちよ、よく聞きなさい。私はもう年をとつてあまり先がない。それなのにまた用事ができたために出かけなければならない。それで、ここに一番良く効く薬を置いておくから、ちゃんと飲むのですよ。心配することはないよ』と言って他国へ出かけました」

【二七八頁 七行】「そしてしばらく経つと、旅先から父の使いがやって来ました。そしてこう告げたのでした『父上はお亡くなりになりました』と。その悲しい知らせを聞いて、子どもたちは大変悲しみ、もう頼る人はいなくなったと、心細くなりました。そして『お父さんがいてくれたならば、きっと私たちを可哀想（かれいそう）だと思って助けて下さるに違いない。でも、お父さんはこの世からいなくなった』と嘆（なげ）き悲しんだのでした。」

【二七八頁 終三行】〔常に悲感（ひかん）を懷（いだ）いて心遂（にころつい）に醒悟（しょうご）し〕「そして他に頼る人がいない心細さと、父を亡くした悲しみがヒシヒシと胸に迫って来ました。すると、今まで毒のために顛倒（てんどう）していた心が、ハッと目を覚ましたのです。そして父が残してくれた『薬』は、ますいのではなく色も香りも味も良いことに気付きました。早速（さっそく）服用すると毒はたちまちに消え、病気も治ってしまいました。そうして子どもたちが治ると、それを見計ったように父は他国から帰ってきて、子どもたちの前に姿を見せたのです」

「私が『仏の滅度』を説くのは、これと同じ意味なのです」

—— 《良医治子（ろいじ）の譬え》 ——

【仏の《良医治子・ろいじ》の譬えを、かみ締める】——

【二九頁 一行】「諸々の善男子よ、どう思いますか？ この医師は、用もないのに再び他の国へ行き、死んでもいないのに『死んだ』と言って嘘の知らせを子どもたちにしたのは、子どもをだます行為だったのでしょうか。しかもそのことを非難できるでしょうか？」

【二九頁 二行】すると一同は答えました。／〔不也（いななり）、世尊〕「いいえ世尊。そういう非難はできません」と。

【二九頁 三行】釈尊は言葉を続けます。「実は私はこの医師のようなものです。／〔成佛してより已來（このかた）、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫（なゆた あそうぎこう）なり〕」私は無量無邊百千万億那由他阿僧祇劫（なゆた あそうぎこう）という『無限の過去から永遠の未来まで、ずっと仏である』のですが、／〔衆生の爲の故（ゆえ）に方便力を以て當（まさ）に滅度すべしと言う〕」衆生を救う『方便』として、『もうすぐ滅度する』と言うのです。ですから偽（いつわ）りを言ったとしても、私を咎（とが）める人はいないであります」と、釈尊は仏の『眞実』と『方便』について説かれたのでした。



如來壽量品の二つの要点

(P170・4行/P120・3行)

第一の要点は、「仏の本体」をはじめて明らかにされ、その壽命が「不生不滅」であることを説かれたことです。

第二の要点は、その本仏のこの世への現われである「釈迦牟尼如來」が、「なぜ、入滅されなければならぬか？」を、はっきり説明されたことです。

如來壽量品の三つの意味

(P13・1行/P9・1行)

『如來壽量品』には、三つの大切な意味があるとされています。その三つとは、
《開近顯遠(かいごん けんのん)・開迹顯本(かいしゃく けんほん)・開權顯実(かいごん けんじつ)》

【開近顯遠(かいごん けんのん)】— 《近きを開き、遠きを顯わす》

(P13・5行/P9・5行)

我々から見て近くの事実を出発点とし、その奥にある一番遠くにあるものを顯わすという意味。

釈尊の悟りを通して、永遠の過去からある「法」を知ること。

【開迹顯本(かいしゃく けんほん)】— 《迹(あと)を開き、本(もと)を顯わす》

(P17・1行/P11・終5行)

迹仏を通して本仏を知ること。

【開權顯実(かいごん けんじつ)】— 《權(ごん)を開き、実(じつ)を顯わす》

(P19・6行/P13・6行)

權(仮り)を通して実(眞実)を知ることで、つまり「方便」を通して「眞理・眞実」を知ること。

現実の相の違い

(P34・2行/P23・4行)

人間はその本質において平等(平等相)であるということも眞実ありますけれども、現実のあらわれにおいて違い(差別相)があることもまた眞実であります。～ ところが、その差別相というものは決して固定したものではなく、つねに流動しているものだということがわかつてきます。すなわち縁起によって如何ようにも変わってしまうこともあります。

《思惟のひととき ①》

現実の世界は、「平等だが(平等相)、現実のあらわれにおいて違いがあることもまた眞実。その違い(差別相)は、『縁起』によって如何ようにも変わってしまう」とと庭野開祖は、説いています。

— 「誰もが、『縁起』によって如何ようにも変わってしまう」とは、どのような意味を持つのでしょうか？ 考えてみましょう。

※ 誰もが「縁起」によって如何ようにも変わってしまう という「平等相」を持っている。

一念三千は中道觀の極致

(P35・3行/P23・終2行)

このように、我々人間は、どんな心の世界にも行ける可能性を、誰もが持っているのです。しかもその可能性を『平等』(平等相)に持っているのです。

ですから、目の前の『差別相』は決して固定したものではなく、その人の心の持ち方によって自由に流動させうるものなのです。

これが『十如是』の教えの神髄ともいべき【一念三千】であります。

たんに目の前に見える状態を固定したものとして、平等相・差別相の両面から見るのではなく、それはどうにでも流動できるものであるという見方をしなければなりません。

これが、お釈迦さまの中道觀の極致であると、私は信じています。

平等相に偏せず、差別相に偏せず、しかもその中間の立場をとるというのではなく、〈無限の流動の可能性のなかにこそ真実がある〉という、ものの見方であります。

※『深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅したまわざと知るべし。是れを第五の懺悔を修すと名く』

(『仏説觀普賢菩薩行法經』 四二四頁 七行)

「現われる」とは「自覚」すること

(新しい解釈 P349・終6行)

本仏はすべてのものを生かす力なのですから、その生かす対象によってそれにふさわしい形をとつて現れるのは当然のことです。ですから、人間の世界に現われる時には、人間の世界にふさわしい形となって現われるのです。

現われるということばを、浅く解釈すれば、「現われれば、誰でもそれを見ることができるではないか」という疑問がおこるでしょうが、そうではなく、もともとちゃんと存在するものを「自覚する」ということを「現われる」といったまでにすぎません。すべての人間を生かしている真理であり、(本仏は)すべての人間を生かしている力である限り、我々の内側にも常に存在するものでありますから、(本仏を)我々が何らかの方法でその存在を自覚できないはずはないのです。その自覚が、とりもなおさず「仏」をみたてまつることです。

『汝等當に如來の誠諦の語を信解すべしへ 世尊唯願わくは之を説きたまえ。我等

當に佛の語を信受したてまつるべし』 (二七二頁 一行～終四行)

智・慈・行がそろわなければならない

(P53・終3行/P37・3行)

「文殊菩薩」…智慧(智) 序品～安樂行品(迹門)

「弥勒菩薩」…慈悲(慈) 徒地涌出品～妙莊嚴王本事品(本門)

「普賢菩薩」…実践(行) 普賢菩薩勸發品(本門)

こうならべてみると、『法華経』の内容の構造がよくわかります。人間が正しい、良い人間になるには、何よりもまず「智慧」が必要です。『無智は罪惡である』といわれるよう、悪いことをする人は、本当の「智慧」が無いからです。～ 本当の「智慧」というのは、この世のすべてのものごとの本質をよく見通し ～ ものごとのあいだにある複雑な関係を「正しく見る」ことのできる理智を言います。～ 「智慧」が身に付くと、智慧がまだ身についていない人を見ると、どうしても智慧を身につけるように救ってあげずにはいられない気持ちになります。すなわち「慈悲」の心が湧いてくるのです。「慈悲の心」が湧いて来れば、おのずからそれを「行為・実践」に現わさずにはおれなくなります。

こうして「智慧・慈悲・実践」の三つがそろって完全に行われるようになった時、「仏の教え」は完成したことになります。

仏の三身 一 三身一体

(P66・1行／P45・終3行)

「法身・ほっしん」… 真如そのもの。ギリギリの根源の法。仏の本体。

「報身・ほうしん」… 真理・根源の法を具体化する人格的な力。阿弥陀如来など。

「應身・おうじん」… 実際に人間としてこの世に出現した仏。お釈迦さま。

これらの仏は考えの上で三つに分けられる形であり、本当は一体のものなのです。

『我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり』 (二七三頁 一行)

絶対の存在

(P82・終3行／P58・終7行)

そういう無限の過去から、この世においでになるということになりますと、仏さまはまさしく絶対の存在なのです。～ (いかに偉い人や、莫大なお金など) それらは、いつかは滅し、散じてしまうものなのです。これらは真に我々が頼りにし、依り所にできるものではありません。～ 無限であり絶対であればこそ、全身全霊を投げ出して信じ、頼りにし、お任せすることができるのです。このことを、しっかりとわきまえていなければなりません。

『是れより來、我常に此の娑婆世界に在って說法教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇

の國に於ても衆生を導利す』 (二七四頁 一行)

ほんぞん かくりつ 本尊の確立

(P86・終4行/P61・4行 法華經の新しい解釈P372・終2行)

仏は無限の過去から常にこの娑婆世界にいる。諸仏は、そのただ一つの本仏がいろいろ違った条件のもとに違った相(すがた)をもって出現されたものです。どの仏も尊いお方には違いないのですが、そのもとをたずねれば、すべて「久遠実成の本仏釈迦牟尼如来」に帰一するのだということが、ここではっきりしたわけです。そして、我々の信仰の対象となる本尊が確立することになります。

われわれの会において、「久遠実成の本仏釈迦牟尼如来」を本尊としてあがめたてまつる意義はここに立脚しており、それが最も正しい信仰であることは、經典そのものによって明白に証明されているのであります。

われぶつげん もつ そ しんどう しょこん りどん かん どころ したが
『我佛眼を以て其の信等の諸根の利鉢を觀じて、度すべき所に隨って、～』 (二七四頁 五行)

しゅじょう しょうぼう ねが とくはづくじゅう もの み
『衆生の小法を樂える德薄垢重の者を見ては、～』 (二七四頁 終四行)

ほんのう あか 煩惱は垢である

(P107・終5行/P76・5行)

垢重(くじゅう) というのは、「垢が重なり合っていっぱい付いている」ということです。垢とは「煩惱」をさします。すなわち、「煩惱」は決して人間の「本質」ではなく、その表面についた「付着物」なのです。～ 常に心をよく洗っておれば、垢はたまらないのですが、それを怠っていると、いつの間にか仏性をおおい隠してしまうのです。

しか われじつ じょうぶつ このかた くおん かく ごと
『然るに我實に成佛してより已來、久遠なること斯の若し』 (二七四頁 終三行)

によらい の ところ きょうでん あるいは こしん と あるいは たしん と あるいは こしん しめ
『如來の演ぶる所の經典は、～ 或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示

あるいは たしん しめ あるいは こじ しめ あるいは たじ しめ もろもろ ごんぜつ ところ みな
し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説する所は皆

じつ むな
『實にして虚しからず』 (二七四頁 終行)

ろくわくじげん 六或示現

(P110・終2行/P79・2行)

- 「己身を説く」— 本仏(法身)について説く
- 「他身を説く」— その他の仏、燃燈仏、阿弥陀如来など(報身)について説く
- 「己身を示し」— 釈尊(應身)の身として現れる
- 「他身を示し」— その他の聖人・賢人の身として現れる
- 「己事を示し」— 仏さまの大慈・大悲の救いがそのまま救いの形として現れる
- 「他事を示し」— 一見、仏さまの救いでないような形、苦・痛み・試練として現れる

くのう こうじょう ふ だい 苦惱は向上への踏み台

(P115・1行/P81・終3行)

心の「悩みや苦しみ」は、人間らしい人間となるためのひとつの「踏み台」となるのであって、これも大いに歓迎すべきことだといわなければなりません。～ 苦しいと感ずるのは、自らの心や身体に異変が起こり、周囲とのあいだに摩擦や抵抗を生じている証拠ですから、それを素直に受けとて、ただちに心身を真理の道に引き戻す努力をしなければなりません。～ 我々の日常生活においては、「他事」の方が「己事」よりもむしろ多く経験することですから、それに処する心がけをしっかりと作っておくことが必要なのであります。

《心のひとき (2)》

「(他事の方が己事よりも多いので) それに処する心がけをしっかりと作っておくことが必要」と庭野開祖は説きます。— では、この「心がけ」とはいったいどのような「心がけ」をすることが必要なのでしょうか? 考えてみましょう。

によらい にょじつ さんがい そう ちけん しょうじ も たい も しゅつ またざいせおよ めつ
『如來は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退、若しは出 あることなく、亦在世及び滅

ど もの
度の者なし』 (二七五頁 三行)

「生・死・退・出」とは— 「生死」・すべての変化。「退出」・現象の消滅。 (P124・6行/P88・6行)

じつ あら こ あら によ あら い あら さんがい さんがい み ごと
『實に非ず、虛に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず』 (二七五頁 五行)

(P128・1行/P91・1行)

「實に非ず 虛に非ず」とは— 「實」・物事が現実にそこにあると見ること。

「虛」・物事がそこに無いと見ること。

(P130・1行/P92・5行)

「如に非ず 異に非ず」とは— 「如」・常住ということ。 「異」・変化すること。

(P131・終6行/P93・4行)

「三界の三界を見るが如くならず」とは— 「三界」・人間が住んでいる世界。

三界に住んでいる人間が、狭いや濁った眼で、自分たちの住んでいる三界を見ているような見方と違って、如来は透徹した眼で、この世界の本当のすがたを見ている。

(P125・終2行/P89・5行)

われわれ凡夫は、現象のうえでしか物事を見ないというくせがあるために、ともすれば、その仏さまの大慈・大悲を見失って、驚いたり、悲しんだり絶望したりするのです。～ 澄み切った心・実相を見る眼をもって、「自分は仏さまの大慈大悲に生かされているのだ」ということを信じ、悟りきてしまわねばなりません。～ そうでなくては、いくら万巻の經典を読んでも、何にもなりはしません。お釈迦さまの折角の教えが無に帰してしまうのです。

この世のすべての物事は、「縁起の法則」に従って存在しているのであって～ 現実に『ある』ことは事実であるけれども、「凡夫が眼で見るとおりに『ある』」と決め付けることは間違いだということなのです。～ ふつうの人間は「目の前に見えることしか『実在』とは思わず、それにとらわれて心を乱してしまうのです。

《思惟のひととき ③》

「この世のすべての物事は、「縁起の法則」に従って存在しているのであって、目の前の出来事は、それそのものが「厳然と実在」しているのではなく、「縁起」によって存在しているものにすぎない」と、庭野開祖は説きます。

―― この庭野開祖の教えをあなたは、どのように受け止めますか？

①『如來 明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生、種種の性・種種の欲・種種の行・

種種の憶想・分別あるを以ての故に、～種種に法を説く』 (二七五頁 六行)

如来は『実相』を明らかに見極めているために見誤るということがありません。ところが衆生は、それぞれの性質・欲望・行動・思想・利害を前面に打ち出して『自分のものさし』で物事を見てしまうために、お互いの欲望・思想・利害がぶつかり合って、苦が生じ争いが起こるのです。～ ですから、如来は衆生を完成された人へと向上させるために、様々に説き教化していくのです。

②『若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず。貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想

妄見の網の中に入りなん。～ 諸佛の出世には值遇すべきこと難し』 (二七六頁 一行)

そのうえ 徳の薄い人は良い行いをすることができず、自らを高めようとすることをやらなくなります。そして自らを高めることがないために、結果的に五感の欲にとらわれて、『自己本位のものの見方・考え方の網（自分本位の網）』の中にがんじがらめになり、正しい生き方ができなくなるからです。

③『我成佛してより已來甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず』

(二七五頁 終四行)

私は成仏してから久遠の無限の時を経ており、あらゆる所でいつも法を説いているのです。

《思惟のひととき ④》

①『諸の衆生、種種の性・種種の欲へ・種種の憶想・分別あるを以ての故に』、②『薄徳の人は善根を種えず。～五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん』。―― 「苦」が生じる理由、愚かだと徳を積むことすらできない理由を説いています。これらの経文を味わってみましょう。

本能は無記

(P159・1行/P112・終2行)

「無記(むき)」というのは、善とか悪とかいう名をつけられない、善悪以前のものという意味です。～もし貪欲(とんよく)という**本能**が悪だとしたら、われわれは何も食べずに、死んでしまわなければなりません。～仏さまの教えは、本能はしりぞけるものではなく、その本能にとらわれ、それを貪(むさぼ)ることによって燃え上がる煩惱の火が、人間の不幸を生むのだと断じられているのです。こここのところを誤解すると、苦行主義とか禁欲主義のような極端に陥(おち)いって、かえって本当の救いから遠ざかってしまうのです。お釈迦さまの教えはあくまでも**中道**にあるのだということを忘れてはならないのです。

佛を見ざるもの

(P172・4行/P122・2行)

徳の薄い人は、そういうお方(仏さま)のご在世に巡り合えても、その教えに触れることができません。～〈仏さまがあらわれたもう〉ということは、つまり、我々が〈仏さまの存在を自覚する〉ことに他ならないのです。～いくら仏の教えを聞かされても、心がそれに向かなければ仏さまは見えないのです。～久遠実成の仏さまは、いつでもどこでも、我々と一緒にいてくださっているのですが、我々の心が仏さまを見たてまつらなければ、その救いが現われるはずはありません。～仏の教えは、あくまでも我々のほうから求めて行かなければならぬのです。求める心がなければ、目の前で教えが説かれていても、耳に入りません。耳に入ったとしても、胸にしみ込んでしません。～「求める努力は、あくまでも人間自身がしなければならない」—これがお釈迦さまのお教え下さった大眼目のひとつです。

『是の諸の罪の衆生は 惡業の因縁を以て 阿僧祇劫を過ぐれども 三寶の名を聞かず』

(『如來壽量品』二八一頁 一行 / 『經典』十九頁 終二行)

『瞋恚の意を以て我を輕賤せしが故に、二百億劫常に佛に值わず、法を聞かず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く』

(『常不輕菩薩品』三二二頁 七行)

『目を閉(と)すれば則(すなわ)ち見、目を開けば則(すなわ)ち失う』

(『仏說觀普賢菩薩行法經』三九九頁 四行)

目を閉じて心静かに精神を集中すれば、確かに仏さまを見ることはできるが、目を開いて現実の世界に目を向けると、仏さまのお姿も、その説かれる教えも、どこかへ飛んで行ってしまい霞(かす)んでしまう。

恋慕渴仰

(P176・終3行/P125・5行)

我々は、こころやすく仏さまのお名前を口にしていますが、静かに考えてみる時、この末法の世において仏さまに会いたてまつることは、実に大変なことなのです。～この世で仏さまにお会いするなど、並大抵のことできることではありません。

《思惟のひととき ⑤》

「『仏さまがあらわれたもう』ということは、つまり、我々が『仏さまの存在を自覚する』ことに他ならないのです」、「いくら仏の教えを聞かされても、心がそれに向かなければ、仏さまは見えない」、「この末法の世において仏さまに会いたてまつることは、実に大変なことなのです」と庭野開祖は説きます。 — 「仏さまがあらわれる」、「仏さまが見える」、「仏さまに会うことは大変なこと」。これらのことについて、かみ締めてみましょう。

良医治子の譬え

(P182・6行/P129・5行)

『法華七諭(ほっけしちゆ)』の第七の譬(たと)え。

『速 かに苦腦を除いて復 衆 の患 なけんと』 (二七七頁 終四行)

『此の子 慰 むべし』 (二七八頁 二行)

『常に悲感を懷いて心遂に醒悟し』 (二七八頁 終三行)

《思惟のふいかけいまとめ》

今日の『如來壽量品 第十六(前半)』の学びを通して、何を学び取ったか?

(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) カみ締めてみましょう。

合 掌